

洗足学園音楽大学

JOINT RECITAL③

<4年生によるリサイタル講座>
Portrayal sound ~7人の音の描写~

ご挨拶

本日は学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル」においていただき御礼申し上げます。洗足学園音楽大学のメインステージの前田ホールで、大学4年間の集大成の演奏を披露するために選抜学生39名による6回のジョイント・リサイタルを開催する運びとなりました。

各出演日の学生がそれぞれの思いで、プログラムや副題を決め、この日の為に準備をしておりました。専門コースの違いはあっても大きな会場で初めてのリサイタルを行う「責任と研究成果」を聴いていただければ大変な喜びとなります。出演学生が、その独自の構成と演出を競い、教員の講評審査を受けてこの舞台から巣立ち、現在は欧米各地に留学しコンクール入賞者や、国内外オーケストラ、教員、プレーヤーとして活躍する卒業生も多く、本学の講師として活躍するものもいるという喜ばしい実績を持っております。

この演奏会を基に日本の、そして世界の楽壇へと羽ばたく彼らに応援の拍手をお願いいたします。

学内リサイタル講座 教授 渡部 亨

本日は4年生による学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル③」にお越しいただき、誠にありがとうございます。4年生という学生生活最後の年に感染症が流行してしまい、思うように練習することが出来なくなったり、数々の演奏会が中止になってしまったりと、私たちにとって苦しい日々が続きました。このような状況の中、このリサイタルで4年間の集大成を披露できます事、メンバー一同、大変嬉しく思います。「Portrayal sound ~7人の音の描写~」の副題通り、一人ひとりの思いが音によってこの前田ホールに描写され、皆様に感じ取って頂けますと幸いです。

最後になりましたが、本日の演奏会の開催にあたり、ご協力を頂きました関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

出演者代表 管楽器コース 杉田 愛実

新型コロナウイルス感染拡大を防ぐ為のお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

2020年10月17日（土）開演14:30（会場14:00）

洗足学園音楽大学 前田ホール

主催：洗足学園音楽大学・大学院

～Program～

1.小松 幹 (Percussion)

J.S.バッハ／無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調 BWV1007 よりプレリュード
Johann Sebastian Bach (1685-1750) // CelloSuite No.1 in Gmajor BWV1007 Prelude

池辺晋一郎 (1943-) / スネアは唸り、そして飛翔する

2.杉田 愛実(Clarinet)

L. バッシ / 歌劇『リゴレット』の旋律による演奏会用幻想曲
Luigi Bassi (1833-71) // Fantasia di Concerto “Rigoletto”

-休憩-

3.高倉 綾乃 (Trumpet)

A.アルチュニアン / トランペット協奏曲
Alexander Arutiunian (1920-2012) // Concerto for Trumpet
第1楽章 Andante-Allegro energizing
第2楽章 Meno Mossi
第3楽章 Tempo I

4.見原 さやか (Piano)

B.バルトーク / 戸外にてBB89 Sz81 より
Bela Bartok (1881-1945) // Szabadban Sz.81 BB89
笛と太鼓 Sippal,dobbal
ミュゼット Musettes
狩 Hetzjagd

-休憩-

5.高木 理子(Trombone)

J.ter.フェルトハウス / アイ ワズ ライク ワオ!
Jacob ter Veldhuis (1951-) // I Was Like Wow!

6.網本 真子 (Saxophone)

J.イベル / 室内小協奏曲
Jacques Ibert (1890－1962) // Concertino da Camera
第1楽章 Allegro con moto
第2楽章 Larghetto Animato molto

Pf.鈴木由紀子

Pf.竹崎聡子

Pf.横山歩

1.小松 幹(Percussion)

東京都出身。都立王子総合高校卒業。15歳より打楽器を始める。洗足学園音楽大学打楽器コース3年次成績最優秀賞。第21回万里の長城杯国際コンクール打楽器部門3位、第17回イタリア打楽器国際コンクールスネアドラム部門1位、第29回日本クラシックコンクール打楽器部門入賞。これまでに打楽器を橋本淳平、高田亮の各師に師事。室内楽を山本晶子に師事。

J.S.バッハ / 無伴奏チェロ組曲第1番ト長調よりプレリュード BWV1007

無伴奏チェロ組曲第1番はバッハが作曲したチェロ独奏用の組曲の中の1つで、作曲以降単純な練習曲として忘れられていたがスペインのチェロ奏者パブロ・カザルスによってその価値が再発見されて以降、バッハの作品の中でも特に高く評価されるものの1つである。プレリュード、アルマンド、クーラント、サラバンド、メヌエット、ジークの6曲構成となっているが、今回はプレリュードのみをマリンバで演奏する。

池辺晋一郎 / スネアは唸り、そして飛翔する

この曲は、初演者となる打楽器奏者の吉原すみれが「ドラムロールを5分間持続させる事は可能か」と問いかげをされたのに対し、「一日中でもやっていると返答したことからインスピレーションを受けて作曲された。曲の中核はロール奏法によるppppからfffまでのcresc.、dim.が担っており、音量やリズムの変化により次第に目には見えぬエネルギーが集中していき、唐突な16分音符により解放される。後半部は、打面を手でミュート、布でミュート、打面への圧力や、rim、胴、スタンド、床へと叩く場所の変化により、スネアドラム一台から様々な表情を引き出す。前半部に対する後半部のアクティブな一面を持ち、様々な特殊奏法によって一台の太鼓の可能性を最大限探し尽くしている、まさに <スネアは唸り、そして飛翔する>である。

2.杉田 愛実(Clarinet)

茨城県出身。茨城県立水戸第三高等学校音楽科を卒業。2018年第20回日本演奏家コンクール 木管楽器部門第2位、合わせて横浜市長賞を受賞。洗足学園音楽大学前田記念奨学金奨学生。ビエール・ジェンソン氏のマスタークラスを受講。これまでにクラリネットを柴田 真理、千葉 直師、芳賀 史徳、大浦 綾子の各氏に師事。室内楽を山根 公男に師事。

L. バッシ / 歌劇『リゴレット』の旋律による演奏会用幻想曲

《リゴレット》は、G.ヴェルディ(1813-1901)が作曲した全3幕からなるオペラで、1850年から51年にかけて作曲されたヴェルディ中期の傑作である。ヴェネツィアのフェニーチェ座で、かつてない大成功を収めた初演の後、この作品はイタリア各地だけでなく、オーストリア、ハンガリー、ドイツ、イギリス、アメリカなど世界各地で次々に上演され、いずれも大絶賛を浴びた。L.バッシはイタリアの作曲家である。ミラノ音楽院で学び、ミラノスカラ座の首席クラリネット奏者だった。彼の日常生活の中でオペラに関わることは、バッシが彼自身のクラリネットのために書いた27曲のうち15のオペラの幻想曲を書くことにつながった。特に作品の中から主題を求め、クラリネットとピアノのために極めてドラマティック、かつ変化に富むコンサート用幻想曲に仕立て《リゴレット》は、それらの中で最も有名である。冒頭は減七の和音と共に執拗に繰り返され、クラリネットに受け継がれる。有名な〈美しい恋の乙女よ〉や〈あの娘の涙が見えるようだ〉などの重唱やアリアを奏で、カデンツァが現れ姿を変える。技巧的なパッセージを繰り広げ、華やかに終結へ向かう。

3.高倉 綾乃(Trumpet)

東京都出身。現在、洗足学園音楽大学4学年在学中。トランペットを中里州宏、佛坂咲千生、中山隆崇の各氏に師事。

A.アルチュニアン / トランペット協奏曲

アルメニアの作曲家アレクサンドル・アルチュニアンはエレバン、モスクワで作曲を学び、1954年にはアルメニア交響楽団の音楽監督を務め、エレバン音楽院で作曲を教え教授となった。このトランペット協奏曲は1950年に、ウクライナ出身のトランペット奏者ティモフェイ・ドクシツェルの為に為に作曲された。アルメニア出身の彼ならではのアルメニア民族音楽の要素が多く含まれており非常にジブシー的な響きで旋律が気高く美しい。

第1楽章(Andante-Allegro energizing)

トランペットが民族的で抒情的な旋律を朗々と奏で伴奏がテンポを早めるとトランペットは快活な旋律をのびやかに歌う。

第2楽章(Meno Mossi)

弱音器を付け哀愁を帯びながら静かに語り出す。とても寂しげで過去を思い出しているかの様な雰囲気包み込まれる。

第3楽章(Tempo I)

再び快活なテンポに戻り、第1楽章の旋律が繰り返される。最後には華やかなカデンツァを挟みドラマティックに幕を閉じる。

4.見原 さやか(Piano)

東京都出身。8歳からピアノを始める。都立総合芸術高等学校に在学中、定期演奏会での伴奏者に選抜されたり、旧前田邸で催された在校生コンサートに選抜されたりするなどしている。ベータン音楽コンクール第10回にてベスト30賞を受賞。洗足学園音楽大学にピアノ&作曲コースに入学し作曲とピアノの二つの視点から勉学に励み、3年次にアンサンブル・スタディ・クラスに編入をする。ピアノを飯野明日香、山岸真由美に、室内楽を新居由佳梨、浦壁信二の各氏に師事。

B.バルトーク / 戸外にて BB89 Sz81 より

バルトーク・ベーラはハンガリー出身の作曲家である。民族音楽の研究に力を入れた人物の一人であり、民謡の採集、記録を残すために自ら蓄音機を持参して録音したり、民族に属する人々が歌った民謡を写譜したりして研究に没頭した。採集した民謡を出版したり、自らの作曲技法に取り入れたりした。今回演奏する曲目は<戸外にて>より抜粋して、三曲を演奏する。

笛と太鼓

この曲は、ピアノソナタやピアノ協奏曲と同じ時期に作曲された曲である。

冒頭の左手の打楽器的な序奏が4小節続き、後に右手の旋律が続いてノンレガートで鋭利さを含んだ音色で8小節間奏でられる。これが主題となり、変奏されたり転調した状態で数回繰り返される。ポリリズム的要素も至る所に書かれておりリズムミカルな曲調を聴いて楽しんで頂けると思う。

ミュゼット

この曲のタイトルの意味は、複数のバグパイプを指している。

バルトークが惹かれていた民族楽器の一つである。この曲以外にもソナチネやマイクロコスモスより<バグパイプ>などのピアノ作品にバグパイプの旋律を用いるほどお気に入りのようである。

終始書かれているトレモロはバグパイプの演奏の特徴を緻密に描写している。調性を変えて書かれているトレモロの表情の変化に注目しながら聴いていただきたい。

狩

バルトークはピアノにおいての演奏技術の限界を突き詰めようとしてこの曲を作曲している。左手は休みなくオスティナートを奏で続け、オスティナートの音域も徐々に広がっていく。左手に対し右手は、律動的に始まり、音形が変わってさらにアグレッシブになっていき、クライマックスでは見事なフィナーレを迎えるのが見どころである。

5.高木 理子(Trombone)

私立八王子学園八王子高等学校普通科音楽コース卒業。洗足学園音楽大学3年次在学。トロンボーンを倉田寛、藤原功次郎の各氏に師事。2度オランダへ短期留学をしBart Claessens、Pierre Volders、Remko De Jagerの各氏にプライベートレッスンを受講。2018年に行われたベルリン・ドイツ交響楽団のバストロンボーン奏者であるTomer Maschkowski氏のリサイタルに出演。

J.ter.フェルトハウス / I Was Like Wow!

JacobTVとしても知られるJacob ter Veldhuisは、オランダの前衛的なクラシック音楽の作曲家である。彼の作品は音源や動画などをバックに演奏をするスタイルであり、その音源には人間の声のサンプルを中心にメロディーが構築されている。2006年にオランダ出身の世界的トロンボーン奏者である、Jorgen van Rijenのために作られたこの曲も、2003年のイラク戦争で負傷した2人の若いイギリス兵士のインタビューが元となっている音源を用いた演奏である。トロンボーンの演奏と共存するそのインタビューは、将来のある若い2人の兵士に残した残酷な戦争の爪痕と悲惨さを物語っている。

6.網本 真子(Saxophone)

香川県出身。高松第一高等学校音楽科を卒業。第32回香川ジュニア音楽コンクール木管部門銀賞。第5回Kサクソフォンコンクール大学・一般部門第2位。2018年度、2019年度、洗足学園音楽大学前田記念奨学金奨学生。アカデミー・ハバナラin JAPAN vol.3でハバナラ・サクソフォンカルテット、ブルーオーラ・サクソフォンカルテット室内楽マスタークラスを受講。これまでにサクソフォンを横田糸子、天造智子、大城正司の各氏に師事。室内楽を貝沼拓実、二宮和弘、ジャズ奏法を佐藤達也の各氏に師事。

J.イベル / 室内小協奏曲

この曲は150年以上に及ぶサクソフォンの歴史の中で、最も優れた作品の一つとされている。1936年にドイツのサクソフォン奏者シールド・ラッシャーの演奏に感銘を受け、ソプラノ歌手マリー・フロイントがラッシャーのための作品を作曲するようイベルに依頼したことが作曲の契機となっている。イベルはサクソフォンのための曲を作るのが初めてであったため、作曲にあたってフランスの名サクソフォン奏者であり、後にパリ音楽院の教授を務めたマルセル・ミュールに助言を請い、試奏を依頼した。

第1楽章 Allegro con moto

明快なソナタ形式。不協和音を含む短い序奏に続いて、サクソフォンが躍動的な第1主題を奏する。第2主題は穏やかなもので、対照的な気分を持っている。全体的に爽やかさと活気に溢れた楽章となっている。

第2楽章 Larghetto Animato molto

通常の協奏曲の緩叙楽章と終楽章がアタックでつながられた形を取っている。ロンド形式。サクソフォンが独白のように無伴奏で語り、穏やかな主題を奏する。拍子が変わり、活発なロンド主題が登場、続いて奇想曲風の副主題が奏される。2つの主題が発展した後カデンツァ、主題再現の順に進み、軽妙に締めくくる。